



contents

2 技術に会う 15

4 「特集」

「自分力」のテクノロジー

——イノベーションモデルとしての自己生産

6 「自己生産」の思想

——生命、社会、テクノロジー 中島秀人

9 ケーススタディー「1」ナノテク

自己組織化

——「自然」を制御するナノの手 川合知一

12 ケーススタディー「2」製造業

逆生産

——資源と情報の循環が産業構造を変える 木村文彦

14 自己循環への取り組み

日立アプライアンス株式会社 栃木事業所

株式会社関東エコリサイクル

16 ケーススタディー「3」再生医療

細胞シート工学

——生物の力と先端技術の融合 岡野光夫

19 ケーススタディー「4」鉄道システム

エネルギー回生

——環境への視座と先進技術が 古閑隆章／長洲正浩

22 永瀬唯のサイエンス・ベースタイプ

モータ・インバータ技術

——産業を駆動し、生活を拓く基盤プロダクト

28 新学入門 3

脳神経生理学 信原幸弘

30 HITACHI FILE

GeoMatton Farm

——地図情報によるビジュアル農業管理システム

32 日立紀行 7

日立鉾山

34 ダントツさんが行く！ 14

ヒートリサイクル風アイロンビッグドラマ

35 技術の日立・今昔 11

変圧器

表紙◎
ル・コルビュジエ
「ロンシャンの礼拝堂の
スケッチ」
©FLC/ADAGP, Paris &
SPDA, Tokyo, 2008

ニ シ ン 市 の ア ル ヴ ァ ー ・ ア ア ル ト

写真と文

渡部千春

冴えない写真ですいません。

言い訳だが、押し合いへし合いの状況で、まっすぐ撮れただけでも私としてはありがたいくらいではあったのだ。

場所はヘルシンキ。年に一度、10月初旬に開かれるニシンの初日にたまたま行ってみた。売っているのはニシンの漬物だけなのだが、ヘルシンキでは大人気の行事。18世紀から続き、2008年の今回は264回目を数える歴史あるものらしい。

この写真を撮った直後、真ん中のピンクのお嬢ちゃんと目が合い無表情なままじーっとこちらを見ているので(フィンランド人は人と目が合っても微笑む習慣はない、とフィンランド人自身が言っていたのだから本当だろう)、すぐにカメラを引つめた。

いやいや、お嬢ちゃん、君を撮ろうと思ったわけじゃない。君が座ってるその椅子だ。

フィンランドと椅子とくれば、アルヴァー・アアルト。この椅子「スツールE 60」は、三本脚の「スツール60」とともに1933年にデザインされ、2008年に75周年を祝い、つい先日日本でもエキシビジョンが行われたばかりである。1920年代から30年代、時代のトレンドはパイプなど自在に形をつくれる金属の椅子。そこへフィンランド人のアアルトは「おらが国の素材でそれくらいやっただけ」と言ったかどうかはわからないが、「画期的な曲げ木製法で椅子をつくった。脚のまっすぐな部分は強度を保つため

無垢でつくられているが、曲がっているところに細かいスリットが入っており、細い板を差し込んで曲げる。

曲げ木技術の革命児。デザイン史上の大作。そんなものが屋外の魚臭い市場にぽんぽんと置いてある。私からしてみれば、ホオズキ市に剣持勇や柳宗理の椅子があった！くらいの衝撃なのだが、さすが現地人、何事もないかのように座っている。

実際、ヘルシンキにいとアアルトのスツールシリーズは至るところで使われている。図書館にあり、カフェにあり、作業場にある。

フィンランドには豊富にある木材で、構造も簡単なので修理もたやすい。ペイントしたり座面を布張りにしたりすれば雰囲気もがらりと変わる。DIY好きなフィンランド人にとって、恐らく最も一般的で、身近に感じる椅子だろう。

このところ家具デザインに対する関心が高まり、それを飯の種とする私にとってはありがたいことではあるけれど、家具を芸術品のようにもち上げてしまうものには疑問がある。鉛筆の六角形を見よ！ カップヌードルを見よ！ ビックのライターを見よ！ 人々の生活に溶け込んでこそ真にデザインの名作といえる。

ニシン料理を待っているのだろうか、何の気なしに座っているこの嬢ちゃん、兄さんらこそ、アアルト・スツールの正しい使い方を知っていると見えよう。

わたべ・ちはる……1969年新潟県生まれ。デザインジャーナリスト。東京造形大学卒業。主な著書に『北欧デザイン』(プチグラフィック)、『北欧デザインを知る ムーミンとモダニズム』(NHK出版)、『これ、誰がデザインしたの?』『続・これ、誰がデザインしたの?』(美術出版社)など。『デザインの現場』オフィシャルブログ「これ、誰がデザインしたの?」にも執筆中。

<http://blog.excite.co.jp/dezagen/>